

# ロリニヤルから世界へ

―カナダ東部におけるベーツ院長関係地訪問―

池田 裕子

## I はじめに

## II 幼少・少年時代のベーツ資料

## III カナダへの旅立ち

## IV モントリオールにて

### 1 故郷ロリニヤルとヒル

#### (1) ロリニヤル

#### (2) ヴァンクリーク・ヒル

### 2 ベーツ家の故郷

#### (1) イーストン・コーナー

#### (2) ウォルフォード墓地

### 3 母校マギル大学

#### (1) マギル大学アーカイブズ

【地 図】<sup>(1)</sup>



- VI おわりに
- V トロントにて
- 5 彫刻家齋藤智さん
- 4 アルマンさんとチャールズさん
- (2) マクドナルド・カレッジと“Mastery for Service”

## I はじめに

広報誌『K.G. TODAY』に「ベーツ先生の原点」というタイトルでC・J・L・ベーツ第四代院長（一八七七～一九六三、院長在任一九二〇～四〇）の少年時代のエピソードを紹介したことがある。<sup>②</sup>その時、ベーツの故郷L'Originalをどうカナ表記すべきか迷った。学院史編纂室所蔵の日本語履歴書に次のように記載されていたからである。<sup>③</sup>

原籍 加奈陀オンタリオ州プレスコット郡リオリーナル村

現住所 兵庫縣武庫郡西灘村原田関西學院構内

外国の固有名詞をカナ表記する場合、戦前の宣教師名については、現在の感覚からは多少違和感を覚えても、既に定着している表記を用いた方が混乱は少ない。では、地名はどうだろうか。地名は現在の一般的表記に合わせるのが親切であろう。しかし、L'Originalという地名は、現在に限らず、ベーツ在職中の関西学院においても一般的だったとは思えない。

フランス語なら、L'Originalは「ロリニャル」とするのが適切だと思われた。しかし、カナダの地名なので特殊な発音がされている可能性がある。そこで、東京のカナダ大使館広報部に問い合わせしてみた。「残念ながら大使館でご案内できません。ご使用者の判断にて適当な訳語をご使用ください」。<sup>④</sup>六日後に受け取った回答を見て、それなら「ロリニャル」と表記しようと思った。さらに念のため、モントリオール在住のアルマン・デメストラル (Armand

de Mestral) ゃんに確認した。<sup>(5)</sup>「お祖父様の故郷 L'Original を日本語表記したいので、正しい発音を教えてください。"L'original" で間違ありませんか」。「全くその通り。この地名はフランス語でムースの意味です」。ようやく私は過去の表記にとらわれることなく、自信を持って「ロリニャル」と書くことができるようになった。<sup>(6)</sup>

では、それはどのような村だったのか。「ベーツ先生の原点」と題してこの村のことを紹介しておきながら、「ロリニャル」は私にとって想像の世界だった。関西学院関係者でベーツの故郷を訪問したという話は聞いたことがなかったし、そのような記録も見当たらない。私は自分の足で二一世紀のロリニャルを訪ねてみようと思った。少年時代のベーツが歩いた道を歩き、オタワ川を眺め、同じ空気を吸う。それがベーツ理解の一步につながるように思われた。目の前を流れるオタワ川は、ベーツ少年にとって未だ見ぬ世界への入口だったはずだ。私はモントリオールとトロントを基点に関係地を巡る計画（二〇一二年八月二三日から九月四日までの一一泊一二日）を練った。

旅立ちの前に、故郷でのベーツの様子を示す資料を振り返っておこう。

## Ⅱ 幼少・少年時代のベーツ資料

ベーツの幼少・少年時代の資料は数少ない。限られた資料を使って広報誌『K. G. TODAY』に書いたのが「ベーツ先生の原点」である。

### ◆ベーツ先生の原点

関西学院は、一八八九年にアメリカの南メソヂスト監督教会によって創立された小さな学校でした。発展のきっかけは、一九一〇年のカナダ・メソヂスト教会の経営参加です。しかし、これは同時に、南メソヂスト派、カナダ・メソヂスト派という対立関係を常に抱え込むことでもありました。この勢力争いや確執をバランスよく治めることに能力を発揮したのが、第四代院長を務めたカナダ人宣教師C・J・L・ベーツです。ベーツの見事な調整能力は、少年時代を過ごした故郷ロリニヤルで培われたようです。

ロリニヤルは、カナダの首都オタワとモントリオールのように真ん中に位置する人口千人程の小さな村で、住民の四分の三はフランス語を話しました。当時、この地域はフランス語人口が増加しつつあったのです。村には、大きなカトリック教会と三つの小さなプロテスタント教会がありました。少年時代のベーツは、日曜の朝は長老派、午後は英国国教会、夕方方はメソヂスト教会に通っていました。この三つの異なる教会での祈り、礼拝、賛美の経験が、自分のライフワークの原点だったと晩年のベーツは振り返っています。

村人たちは、自分の文化と言葉と教会こそが一番だと信じていました。と同時に、寛容な精神と善意と互いを敬う気持ちにより、様々な問題を友好的に解決する術を身につけていました。ですから、ベーツたちが小さなメソヂスト教会を建てた時、カトリックの神父からさえも援助を受けることができたのです。教会の女性が献金を求めに行くと、ベルベ神父は優しく笑いながらこう言って四ドルを差し出しました。「プロテスタントの教会を建てるのに差し上げられるものは何もないけれど、敷地内の古い建物を取り壊せば何かお渡しできるで

しょう」。

この短文が生まれた背景には、私がそれまでに目を通してきた様々なベーツ関係の文献や書簡や写真の積み重ねがある。しかし、直接的に用いた資料は次の二点である。

- ・ 西川玉之助「古い時代の関西学院」『関西学院六十年史』、一九四九年。
- ・ C. J. L. Bates, "The Sixty Years in the Ministry"『関西学院七十年史』、一九五九年。

また、ベーツの少年時代については、「故郷ロリニャルのC・J・L・ベーツ」と題する一文を『学院史編纂室便り』第三二号(二〇一〇年五月一五日)に書いた。その中に、広報誌で紹介できなかったベーツの原点をさらにいくつか紹介した。すなわち、家族関係、生涯の伴侶との出会い、自宅から高校に向かう途中で受けた啓示についてである。その時参考にしたのは、前記以外に次の資料であった(地図、百科事典等を除く)。

(7)

- ・ *Bates Diaries*, 1935-1942.
- ・ Robert Bates, *Newcomers in a New Land*, private edition, 1988.
- ・ Letter of April 6, 1920, from C. J. L. Bates to Dr. Endicott, UCC Archives.
- ・ Letter of Nov. 13, 1956, from C. J. L. Bates to Armand de Mestral.<sup>(8)</sup>

最後のものは、一五歳の誕生日を迎える孫息子（娘ルル（Lulu）の長男アルマン）に自分の高校時代の想い出を語った大変興味深い書簡である。ロリニャルには高校がなかったもので、ベーツは一五キロほど離れたヴァンクリーク・ヒル（Vankleek Hill）に下宿した。したがって、故郷調査はロリニャルだけでなく、高校時代を過ごしたヴァンクリーク・ヒルも対象にすべきだろう。この書簡については、『学院史編纂室便り』第二十二号（二〇〇〇年十二月一日）で日本語訳を紹介しているが、ベーツの原点を伝える数少ない貴重な資料なので、一部修正の上ここに再掲する。

#### ◆ベーツから孫息子への手紙

アルマンへ

誕生日が巡り、おまえは一五歳、ちょうど十代の真ん中になったね。お祖父ちゃんの一五歳の誕生日は、はるか昔のことのようにだ。あれからいろんなことがあった。その頃お祖父ちゃんはオンタリオ州のヴァンクリーク・ヒル高校に通っていた。お祖母ちゃんもそうだった。お祖父ちゃんたちの家はオタワ川のロリニャルにあって、毎週月曜日の朝、「ヒル」と呼んでいたヴァンクリーク・ヒルまで馬車で行き、金曜日になると家に戻った。月曜から金曜まで、お祖父ちゃんはツィード夫人の所に下宿していたんだ。普段はお祖父ちゃんのお父さんが馬車で連れて行ってくれたけれど、時にはメソヂスト教会の牧師さんが連れて行ってくださることもあった。牧師さんはヴァンクリーク・ヒルに住んでおられたが、日曜の夕拝に来られて、お祖父ちゃんの家に泊まり、月曜の朝、お祖父ちゃんを学校まで送ってくださったんだ。イギリス人だがアイルランド系の名前のリチャードソン・ケリー先生が送ってくださったこ

とがあつた。途中、先生はお祖父ちゃんの方を向いてこう言われた。「ジョン、君はキリスト教徒ですか?」。お祖父ちゃんは答えた。「はい、そうあらうと努めています」。それを聞いた先生はおっしゃった。「それは努力すべきことじゃない。信じることだよ」。お祖父ちゃんはあの瞬間を忘れたことがない。それは啓示を受けた瞬間だった。新たな悟りの瞬間であり、新たな生の瞬間だった。キリスト教徒として生きることが泳ぎを覚えることに似ている。水の中に浮ぶことを覚えればいい。信じて従えば簡単なことだ。

お祖父ちゃんのお父さんは九マイルを一時間で走っている馬を持っていた。それは六五年前としては素晴らしかった。しかし、今となつてはそんなことは何でもない。ロンドン・エジンバラ間の急行は一時間に六〇マイルも走るのだから。今や飛行機は音速より速い。

ところで、スエズ問題やハンガリーをどう思いますか? お祖父ちゃんたちは毎日、テレビで話し合われるのを見たり、国連の演説を聴いたりしています。

それでは今回はこの辺で。お祖父ちゃんたちは元気です。

一九五六年十一月十三日

ベーツお祖父ちゃんとお祖母ちゃんより、愛を込めて

トロント

ロイヤル・ヨーク・ロード四二番地



### Ⅲ カナダへの旅立ち

二〇一二年八月二三日、私はエアカナダの成田発トロント行き直行便の機中にいた。飛行機は日本列島を北上し、ベーリング海を越え、一二時間後にトロントに到着する。トロントで国内線に乗り継ぐと、約七〇分でモントリオールだ。そこからロリニャルまでは車で二時間弱と聞いていた。機内で私は、カナダ・メソヂスト教会宣教師としてベーツが一一〇年前に来日した時のことを考えていた。<sup>(9)</sup>

当時二五歳のベーツは、バンクーバーからエンプレス・オブ・インディア号に乗船し、太平洋を横断した。船では、毎朝航行の無事を祈って次の讃美歌<sup>(10)</sup>が歌われたそうである。

涯しも知られぬ 青海原をも

奇しき御手もて 造りし御神よ、

波路ゆく友を 安く守りませ。

ベーツは新妻ハティを伴っていた。一九〇二年二月、トロントのマッセイ・ホール (Massey Hall) で行われた学生ボランティア大会に参加したベーツは、ジョン・モット (John R. Mott) が読み上げた中国からの電文「北中国は呼んでいる。隙間を埋めよ」に立ち上がったのだ。中国では義和団事件により、二五〇人の宣教師と数千人の中国人信徒が殺されていた。その時、ベーツは自分の心に次の歌詞<sup>(11)</sup>が流れるのを初めて聞いたと言う。

正義の君なる 神の御子の  
血にそむ御旗に つづくは誰ぞ。  
悩みのさかずき おおしく受け、  
十字架を負う者 その人なり。



結婚式－1902年8月6日－（『ベーツアルバム』より）

中国伝道を志願したベーツは日本に派遣されることになり、婚約中のハティ (Hattie, Harriet Edna Puip) に手紙で自らの決意を告げた。「私はあなたと一緒に参ります。それだけが私の望みです」。最愛の女性からもらったこの返事に、ドーチェスター通りメソヂスト教会の牧師をしながらウエスレアン神学校で学んでいたベーツは勇気百倍の思いであつたろう。しかし、娘の決心を聞かされた牧師である父親は、寢室に引きこもったまま三日間起き上がれなかったそうだ。<sup>(13)</sup>

一九〇二年八月六日、オンタリオ州モーリスバーク (Morrisburg) のメソヂスト教会で、ハティの父ウィリアム (William Puip) の司式により二人は結ばれた。それから、新婚夫婦はバンクーバーに向け出発したのである。途中ウイニペグで開催中の総会に出席し、日本メソヂスト教会初の日本人年会長平岩愼保に会っている。<sup>(13)</sup> 平岩はベーツ

にとつて初の日本人知己となった。ベーツが日本語を最初に学んだのも平岩からであった。

今回、モントリオールでは、前項で紹介した孫息子アルマン・デメストラルさんとその弟チャールズ・デメストラル (Charles de Mestral) <sup>(14)</sup> さんが私を迎え、故郷での調査に協力くださることになっていた。

#### IV モントリオールにて

##### 1 故郷ロリニヤルとヒル

###### (1) ロリニヤル

チャールズさん運転の車で、モントリオールを出発したのは八月二七日午前一〇時だった。約九〇分後、オタワ川の北岸を走る一四八号線を西進している時、チャールズさんは私にこうおっしゃった。「この辺りの対岸がロリニヤルだ」。オタワ川はケベック州とオンタリオ州の州境を流れている。私に船でオタワ川を渡る体験をさせるため、チャールズさんは遠回りしてくださったのだ。ベーツの幼少時代、ロリニヤルから船で川を渡ってケベック州カルメ (Calumet) に出て、そこから鉄道を利用するのが最も便利な方法であった。<sup>(15)</sup> 今はもう、その渡し舟はない。そこで、春から秋まで運行されているケベック州ファセット (Fasset) と対岸のオンタリオ州ルフェール (Lefaire) を結ぶ渡し舟 (フェリー) を利用するプランを立ててくださった。冬は川が凍るから船は必要ないそうだ。わずか四分の乗船で対岸に渡った私たちがロリニヤル村の入口に辿り着いたのはちょうど正午であった。



ロリニャルの旧刑務所



ルイーズさんとその労作

村の中心部で車を止め、辺りを歩いた。本当に小さな村だった。「一三〇年前、この道をベーツ少年が歩いていた」と思うと、感無量であった。古い家を見ると「一九世紀の建物かしら」と考え、大きな木の前では「ベーツ先生の時代には小さな苗木だっただろう」と思った。L'Originalのカナ表記に疑問を抱いてから一〇年以上が経っていた。ベーツの故郷で「ロリニャル」と発音されるのを私はやっと自分の耳で確かめることができるのだ。中心部で目に留まったのは二つの古い教会（長老派と英国国教会。どちらも現在は使われていない）と刑務所だった。この刑務所はオントリオ州最古のもので、一九九八年まで実際に使われていた。

現在は旧刑務所(L'Original Old Jail)として公開されている場所で、歴史協会のルイーズ(Louise Longueuil)を二〇一一年に出版されている。中にはロリニャルで暮らしていた人々のことが書かれている。「バイリンガルの本です」とおっ

しゃったので、英語で読むことができると安心したが、手にとってみると「バイリンガル」の意味は、フラ



ベーツの生家があったと思われる角

ンス系住民のことはフランス語で、英国系住民のことは英語で執筆したという意味であった。この方針自体、実にロリニャルらしい。

本にはベーツ家の情報も掲載されていた。<sup>(16)</sup> ルイーズさんがベーツ家のことを調べておられた時、長男が二〇世紀初頭に日本に行ったことに気づき、「そんな昔にこんな小さな村からはるばる日本に?」と驚嘆されたそうだ。

ルイーズさんは、ベーツが通っていたと思われる学校が描かれた絵や昔の波止場や渡し舟の写真を見せてくださった。またベーツ家の自宅と会社があったと推測される場所を教えてくださいました。それは、マーストン通りと波止場通りの角だった。現在は空き地になっている。ベーツの父レヴァー (Joseph Lever Bates) は、弟ナサニエル (Nathaniel Bates, Jr.) と協力して八〇一五人の従業員を抱え、大理石と御影石を扱う商売をしていた。<sup>(17)</sup> 所謂ディーラーであり、モニュメント・メーカーである。前述の労作には、「J・L・ベーツは」最近、バーモント州の名の通った丁場「採石場」から大量の大理石を大幅な値引き価格で購入した」という *The Prescott and Russell Advocate*, Vol. 1, No. 1, May 26, 1888 の記事も紹介されている。<sup>(18)</sup> 原石の大量一括購入と自社加工により、中間マージンを省いていたと推測される。波止場のすぐそばは、商売上、最高の立地であったことだろう。

ルイーズさんは「ロリニャル」という地名についてこうおっしゃった。「あんまり小さな村なので、オンタリオ州は英語の名前を付け忘れたのでしようね」。ローレンシアン高原 (Laurentian) のすぐ南に位置するロリニャルでは、四季折々に素晴らしい景色を堪能することができそう。

(2) ヴァンクリーク・ヒル

ロリニヤルからヴァンクリーク・ヒルへのドライブは、ルイーズさんが先導してくださったこともあってスムーズだった。道中、ベーツが啓示を受けたことを振り返る間もないほどであった。大きな墓地が見えた。

ルイーズさんによると、古

い墓石の多くは、ベーツの父親の会社によるものだそうである。私たちはわずか一五分で「ヒル」<sup>(19)</sup>に到着した。今ならベーツは下宿する必要もない。

ロリニヤルに比べ、ヒルははるかに街だった。<sup>(20)</sup>メインストリートの両側に一九世紀の古いレンガ造りの建物が残っていた。いずれもソフトな色合いが特徴の赤レンガで、それがこの街の特徴だった。かつては、街にレンガ工場が四つもあったらしい。

ヒルに関して私が最も気になっていたのは、一九九九年にモントリオールを訪問した時、アルマンさん宅で見つけた写真である。『ベーツアルバム』に貼られていた一枚で、“THE BATES HOME VANKLEEK HILL”の文字があった。前列右端はベーツの父親、中央の女性は母親、少



The Bates Home (『ベーツアルバム』より)



現在の家の外観

年はベーツの下の子チャールズである。ベーツの家はロリニャルだったはずだ。ヒルの家とはどういう意味だろうか。

今回の訪問を前にこの疑問をアルマンさんにつづけたところ、ヴァンクリーク・ヒル博物館 (Musée Vankleek Hill Museum) に問い合わせてくださった。すると、夏の間博物館を手伝っておられたアンジー (Angie Renwick) さんが、写真を手に街を歩き、家を見つけ出してくださいました。そして、ベーツ家がヒルにショールームを持っていたことを教えてくださった<sup>(21)</sup>。おかげで、私は実際にこの家を確認することができたのである。家は現在マーテル社 (Martel & Sons Inc.) の所有となっていた。この会社こそ、ベーツの父親が営んでいた商売の現在の姿なのである。そのことは、ミッシェル (Michelle Landriault) さんが現オー

ナーのお一人アンドレ・マーテル (André Martel) さんに事前に問い合わせ、確認して下さっていた<sup>(22)</sup>。マーテル家はアメリカ合衆国バーモント州からやって来て、ヒルにベーツ家が持っていた家と会社を購入したようだ。あいにく、アンドレさんは石の買い付けのため中国に行っており、不在だったが、会社の中に入れていただくことができた。従業員の方々は会社とベーツ家の関係についてご存知なかったが、ベーツの父親の事業が発展し、今も続いていることを知った私は大変嬉しく思った<sup>(23)</sup>。



ヴァンクリーク・ヒルのマーテル社

「一体、何があったの?! どうして今日は皆、英語を話しているの?!」。席を外していた女性スタッフが戻って来て、私たちの会話の様子に驚かれた。やはり、これもフランス語圏だったようだ。「ごめんなさい。私のせいです。私はフランス語ができないのです」。やっとの思いでそう答えると、「あら、できるじゃない。でも、いいのよ。英語で全然構わないのよ。ただ驚いただけ」と笑顔を返してくださった。

最後に、博物館に寄って、ミッシェルさんにお会いした。アルマンさんもモントリオールから駆けつけ、合流された。「お祖父様はバスケット・チルドレンと呼ばれていたのよ」。ミッシェルさんはそうおっしゃった。ヒルの街の高校には、近隣の村から下宿して通う生徒がベーツ以外にもいた。そんな子どもたちの親は、金曜の午後、ヒルで買い物を済ませると子どもを迎えに行き、たくさん荷物と子どもを馬車に乗せ、家に帰った。子どもたちは週末を家族と過ごし、月曜日の朝、バスケットいっぱいの食べ物と共に馬車でヒルまで送られて来たのだ。まさに、ベーツが書いた通りである。先の写真の The Bates Home の向かいは食料品店で、その二階に何人かの子どもが下宿していたとミッシェルさんは教えてくださった。ベーツ書簡にあるツイード夫人 (Mrs. Tweed) の家とはそこであったのかも知れない。

この他にも、日曜日の午後、ベーツの父親が様々な



ヴァンクリーク・ヒル博物館にて  
左より：チャールズさん、ミッシェルさん、  
アルマンさん



種類のモニュメントの見本を展示し、教会帰りの人々を相手に商売することもあったと教えてくださった。会社は石の輸入と加工を行っていた。御影石はケベック州ビービ(Beebe)から、大理石はアメリカ合衆国バーモント州から仕入れていたそうだ。採石人から直接石を仕入れ、その加工技術は州で一番との評判を得ていた。<sup>(24)</sup>

ベーツが通っていた高校はもはや残っていなかったが、博物館で写真を見せていただいた。教会はヒルに五つあったそうだ。帰途、ハドソン(Hudson)の街を通った。夏にコテージを借りて、娘の家族と過ごしていた場所だそうだ。ベーツはコテージのスケッチを残している。<sup>(25)</sup>

後日、ベーツ家の故郷を訪ねた帰り、高速道路を降りて再びヒルに立ち寄り小休憩をとった。その時、妻ハティの父親が牧師を務めていた旧メソヂスト教会にも立ち寄った。<sup>(26)</sup>

## 2 ベーツ家の故郷

### (1) イーストン・コーナー

ベーツの祖父ナサニエル(Nathaniel Bates)がアイルランドからカナダに移住したのは一八二七年のことである。オンタリオ州イーストン・コーナー(Easton's Corners)に落ち着いてからは、一八九五年に亡くなるまで、ほとんどそこから動くことなく暮らしたとベーツは語っ



Summer Cottage at Hudson,  
watercolor by C. J. L. Bates



イーストン・コーナー中心部

ている。<sup>(27)</sup> ベーツの父は一八五一年にイーストン・コーナーで生まれた。

モントリオールからイーストン・コーナーまでは約三百キロの距離がある。<sup>(28)</sup> そこを日帰りで訪れるのだ。かなりの強行軍である。八月三〇日午前七時半過ぎ、チャールズさんがアルマンさんの家に来られた。一時間後、アルマンさんの運転で私たち三人は出発した。

一〇時半、モリスバーク通過。ベーツが拳式した街である。そのことは、アルマンさんもチャールズさんも初耳のようだった。一一時にノース・オーガスタ (North Augusta) で三〇分ほど休憩を取った。リドー運河に程近い、イーストン・コーナーに到着したのは正午近くになっていた。

イーストン・コーナーはロリニヤルよりさらに小さな村だった。周囲は農場に囲まれており、数軒の家があった。中心部に広場があつて古いメソヂスト教会と学校が建っていた。どちらも一八七〇年代の建築だった。六〇年以上にわたり地元のメソヂスト教会で奉仕を続け、熱心な説教者として知られた祖父ナサニエルにとって、大切な場所である。ベーツ自身、何度か祖父母の家を訪ね、近くに住む親戚と交流していたはずだ。<sup>(29)</sup> ナサニエルの家や農場がどの辺りにあったかなどは、メリックヴィル (Merrickville) の歴史協会で情報を得ることができるだろう。

(2) ウォルフォード墓地

ベーツが眠るウォルフォード墓地 (Wolford Cemetery) はイーストン・コーナーから車で一〇分程の所にあった。今回、私が墓地を訪ねたいと連絡していたため、アルマンさんとチャールズさんの弟ロバート (Robert de Mestral) さんが事前に墓地を訪れ、掃除してくださった。ロバートさんはオタワにお住まいなので、モントリオールよりはるかに近いのだ。墓参りの習慣のないカナダ人にそこまでしていただいて恐縮した。しかも、私の訪問が白内障の手術と重なったため、お目にかかってお礼を申し上げることもできなかった。

日本を去ってカナダに戻った六四歳のベーツは、一九四一年夏にこの墓地を訪れている。そして、「ナサニエル・ベーツ一八一―一八九五」と刻まれた墓石の前で感慨にふけった。「いつの日か私はここに眠りたい。母の隣で、ハティも一緒に。墓石には、名前の他に『日本への宣教師一九〇二―一九四〇』と刻んでもらおう」。八月一日付け日記に記されたその言葉を私は自分の目で確かめたいと考えていた。

祖父ナサニエルの墓は、墓地に入ってすぐの所にあった。ベーツ自身の墓は一番奥まった場所であった。墓碑が五つ並



ベーツ家の墓、影はチャールズさん



ベーツの墓碑

んで地面に埋められていたが、石が沈みすぎたため、数年前に持ち上げ周囲をセメントで固めた(30)そう(30)だ。石には、左(下)から次のように記されていた。

ROBERT NATHANIEL BATES 1881-1920 … 弟

JOSEF LEVER BATES 1850-1919 … 父

JULIET LIGHTHALL BATES 1857-1937 … 母

CORNELIUS JOHN LIGHTHALL BATES 1877-1963

MISSIONARY IN JAPAN 1902-1940 … 本人

HARRIET EDNA PHILP 1876-1962 … 妻



ベーツ家 ー1902年ー

後列：弟ロバート、妻ハティ、本人、  
前列：母ジュリエット、弟チャールズ、  
父レヴァー

(『ベーツアルバム』より)

ベーツは、生前の望み通り、母と妻の間に眠っていた。墓石の文言に關しても本人の希望が叶えられていた。これら個人の名を刻んだ簡素な墓石とは別に、“BATES”と浮き彫りにされた白い大きな石が建っていた。それは石を扱う商売をしていたベーツの父親が造らせたものだそう(30)だ。この碑のそば

には、娘ルルとその夫クロード (Claude de Mestral、アルマン、チャールズご兄弟の両親) の墓もあった。

ベーツの墓には関西学院関係者が訪れている。手元資料で確認できるのは次の二件である。

まず、一九六四年一〇月三日、カナダ親善演奏旅行のためエアカナダ特別機で羽田を発った応援団吹奏楽部がモントリオールに到着した。ベーツの母校マギル大学を皮切りにバンクーバーまで、グレイハウンドバス三台を連ねての演奏旅行が二三日まで続<sup>(31)</sup>けられた。その合間を縫って、メンバー八名が引率の玉林憲義文学部教授と共に墓参りに訪れたのだ。この演奏旅行を楽しみにしていたベーツは、前年一二月二三日にトロントで亡くなっていた。ベーツの娘ルルと一番下の息子ロバートと共に墓前に傳く学生の様子が現地の新聞に写真入りで大きく報<sup>(32)</sup>じられた。

二〇〇一年夏には、教え子の林金輔さん (旧中昭4・文専昭8) が卒寿の記念に墓参されている。帰途、メリックヴィルで休憩し、リドー運河の光溢れる景色を堪能した。セントローレンス川に沿って車を走らせていた時、アルマンさんが私にこうおっしゃった。「アメリカはこの辺りから突然攻め込んできたのだ」。この息を飲むほど美しい運河が、実は米英戦争 (一八一二―一五) 後、防衛のために造られたものであることを実感させられた瞬間だった。

### 3 母校マギル大学

#### (1) マギル大学アーカイブズ

マギル大学 (McGill University) はベーツの母校である。しかし、履歴書の学歴欄がクイーンズ大学 (Queen's University) の M.A. 取得から書かれていることが多いため、失念されが

ちである。しかも、卒業に到っていないことが前回の訪問調査により明らかになっている。今回、アーカイブズのテレサ (Theresa Rowat) さんをお願いして、ベーツ在学中の記録 (学籍簿、写真等) を探していただいた。

幸い、ベーツの学生カードが残っていた。それによると、所属は人文学部で、在籍期間は一八九四年から九七年までと一九〇一年から〇二年までであったことがわかる。西暦の前に付けられた数字は学年を表している。その前の“P.”は“Partial Student”を意味すると思われる。ベーツは“Partial Student”として大学生活を始めたようだ。試験に合格しての入学でないことは *McGill University Scrapbooks* の一八九四年九月二八日付けの記事からも明らかである。そこには一年生二七名、二年生三名、三年生一名の入学試験合格者氏名と出身校が掲載されているが、ベーツの名はない。ところが、一八九六年のクリスマス試験の記事には二年生の欄にベーツの名が見られるのである。

出生地が“L'Original, Q.”入学時の住所が“L'Original, Ont.”となっているのは、ベーツの故郷の地名“L'Original”を正しく認識する人がモントリオールに少なかったことを意味する。まして、遠く離れた日本に残る資料に正しい表記を求めるのは酷だったかもしれない

Name of Student		J. L. Bates		L'Original, Q.	
Name of Parent or Guardian		J. L. Bates			
Home Address at Entrance		L'Original, Ont.		Methodist	
Previous Address		P-1 1894-5			
		2 1895-6			
		3 1896-7			
		P-3 1901-2			
Degree		Year	Degree	Year	Degree

ベーツの学生カード (マギル大学アーカイブズ所蔵)

ない。

この他、ベーツが学んでいた当時の人文学部校舎の写真を見せていただいた。それは関西学院西宮上ヶ原キャンパスに当てはめると、時計台に当たるシンボリックな建物であった。建築時の校舎が増築された様子とそれを示す資料を拝見しながら、テレサさんの説明を受けた。また、ベーツが学んだもう一つの学校、ウェスレアン神学校校舎についてお尋ねすると、建物は一九四五年にマギル大学の所有となったが、既に取り壊されているとのことだった。

「関西学院の学生の中には、ベーツ院長の推薦を受けマギル大学で学んだ人もいたでしょうね」。テレサさんからの問いかけに、私はハツとした。誰一人思い浮かばなかったからである。ベーツに推薦状を書いてもらってアメリカの〇〇大学に留学したという卒業生の言葉は確かに記憶にある。しかし、マギル大学はどうだろう。ベーツは教え子を母校に送ったことがあったのだろうか。マギル大学は英語で授業を提供している。それでも、モントリオールでの暮らしに溶け込むにはフランス語が必要不可欠である。

マギル大学アーカイブズは、私が希望する資料のコピーに無料で応じてくださった。また、デジタルカメラによる撮影も自由にさせてくださった。こうした対応が大学側の特別なご好意によるものであることは明らかである。

後日、旧市街にあるモントリオール歴史センター(Centre d'Histoire de Montréal)を訪ね、一九世紀後半のモントリオール鳥瞰図を見た。港には数え切れないほどの船が浮び、通りは馬車や馬が引くトラムが行き来している。田舎育ちのベーツにとって、モントリオールは驚くべき大都会であったことだろう。

(2) マクドナルド・カレッジと“Mastery for Service”

マギル大学訪問の目的の一つは、マクドナルド・カレッジ (Macdonald College) のモットー“Mastery for Service”が提案された状況をより明らかにすることであった。関西学院のスクール・モットーとマクドナルド・カレッジのモットーが同じであることを知ったのは一九九九年にマギル大学アーカイブズを訪問した時である。そのことは『関西学院史紀要』で紹介した。<sup>(34)</sup>さらに、その後入手した情報をもとに広報誌『K. G. TODAY』に次の文を書いた。<sup>(35)</sup>

◆“Mastery for Service”のルーツ

関西学院のスクール・モットー“Mastery for Service”がカナダのマギル大学マクドナルド・カレッジと同じであることを知ったのは、一九九九年秋に同大学アーカイブズを訪問した時



Macdonald College Annual, 1934-1935 (マクドナルド・カレッジ図書館所蔵)

でした。カレッジ（農学部、家政学部、教育学部）のモットーは、一九〇六年の開設時に出資者ウィリアム・マクドナルド卿が提案したと言われています。一方、マギル大学出身のC・J・L・ベーツが関西学院で新たに創設された高等学部（商科・文科）のためにこのモットーを提案したのは一九一二年のこととされています。両校のモットーの一致は偶然でしょうか？ それとも、この言葉はベ



ツがカナダから持ち込んだものなのでしょうか？

カナダ側の状況を明らかにする書簡が *Macdonald College Annual* (一九三四年) に掲載されています。それによると、“Mastery for Service”の生みの親はトーマス・D・ジョーンズで、この言葉をマクドナルドに伝えたのはJ・W・ロバートソン(カレッジ長)でした。ジョーンズがカレッジ近くのメソヂスト教会で行った一連の説教“Service”“Equipment for Service”“Efficiency for Service”に関心を持ったロバートソンが、マクドナルドと検討中だったカレッジのモットーのことでジョーンズに相談したのです。この他に考えられるテーマはないかとの質問にジョーンズが答えたのが“Mastery for Service”でした。

「ベーツ先生はマクドナルド・カレッジのモットーをマネされたのです」。ベーツの片腕とも言えるH・F・ウッズウォースの次男デイヴィッドさんからお聞きしたこの言葉が事実なら、これらの人物とベーツの関係、あるいはカナダに休暇帰国中のベーツの足取りを追うことにより、両校のモットーの関係を示唆する新たな発見があるかも知れません。

まず、*Macdonald College Annual*の現物、できれば創刊号からカレッジ・モットーが提案された頃までの号を確認したいと思った。私が入手していたのは一九三四～三五年版に掲載された書簡部分のコピーだけだったからである。そこで、アーカイブズの紹介を受け、マクドナルド・カレッジ図書館を訪問した。

図書館でわかったのは、*Macdonald College Annual*は、一九三二年からの四冊しか保存されていないということである。他の三冊には“Mastery for Service”に関する記載は見当たらなかった。

そこで、書簡掲載号のみに集中したところ、前頁に「Our College Motto」と題する短文が掲載されていることに気付いた。

#### ◆我がカレッジ・モットー

我がカレッジ・モットーに関する公式記録は何もありません。実際、その言葉が選ばれたことに關し、何らかの記憶を持つ人間はほとんどいないのです。一九三二年夏に起こった幸運な出来事のおかげで、このモットーに関する調査を続ける必要がなくなったようです。入手できた事実を全て記録すべきなのは言うまでもないことです。誤った考えが広く知れ渡ることがしばしばあります。そうして、創立者が本来抱いていた思いが失われてしまうのです。永遠に記録すべき事実を示すことにより、そうしたことを防ぎましょう。本誌はそのため誌面を提供します。さらに、情報を広く知らしめ、より深い調査研究を促したいと考えています。

執筆者を探し出し、連絡を取ってくださったC・H・アデル師に深く感謝します。T・D・ジョーンズからアデル師宛て書簡の全容を公開し、事実を明らかにします。

こうして公開された書簡を使って広報誌に書いたのが、前掲の「“Mastery for Service”のルーツ」である。この機会に、併せて書簡全文を紹介しておく。登場人物については調査を進めているので、いずれ別稿にまとめるつもりである。

◆ T・D・ジョーンズ書簡

アデル様

カレッジのスクール・モットーに“Mastery for Service”が選ばれたことについて話をして欲しいとのこと依頼にお答えし、私が存じ上げる事実をお伝えしましょう。

「エホバの僕」に関する講義に靈感を受けた私は、サントンドベルヴェ (Ste. Anne de Bellevue) のメソヂスト教会の仕事をお受けし、一連の講演、あるいは説教の準備をしました。その中で私は、キャリアを築くには“Service”が最も純粋な動機になると理論付け、テーマを“Service” “Equipment for Service” “Efficiency for Service” として発表しました。一連の話を終えた翌週の日曜の夕刻、ロバートソン学長 (Principal Robertson) との会食へのお招きを喜んでお受けしました。ロバートソン博士は礼拝には出席しておられませんでしたがお噂は何度も耳にしていましたし、博士の描かれるビジョンに深い関心を抱いていたからです。

食事の後、博士と私は表の居間で一休みして少しばかり話をしました。その時、ロバートソン博士はこうおっしゃいました。「教会には出席していませんが、お目にかかりたいと思っています。他の方々を通して、あなたのお話、とりわけごく最近行われた service に関する説教に深い関心を抱いていたからです。ウィリアム・マクドナルド卿と私は、カレッジ・モットーをどうしようかと考えています。古典の中に私たちの目的を具現化したものはありませんでした。私たちはあなたのテーマに感銘を受けました。卿は、それらの中から選ばせていただく以上に良い方法はないと提案されました。そうさせていただいてもよろ

しいでしょうか」。思いがけないお申し出にドギマギしながらお答えしました。「ロバートソン博士、どうぞ何なりとお使いください」。博士がどの言葉をお選びになるか、私は興味を覚えました。しかし、他にどんなテーマが考えられるかと博士はさらに質問を続けられたのです。「ただひとつ、“Mastery for Service”ですね」。そうお答えしました。「その言葉で何をおっしゃりたいのでしょうか」。博士はお尋ねになりました。「私はこう考えます。第一に、サービスのためには自分自身を完全に律していなければなりません。精神の各プロセスを制御するように。すなわち、肉体の力を支配し、情熱を支配し、感情を支配するのです。次に、サービスのためには世界を支配しなければなりません。精神の各プロセスを制御するように。すなわち、肉体の力を支配し、「欠落」人が人生を見出すあらゆる領域におけるサービスのために」。私たちは、しばらく話し合いました。やがて辞去した時、学長は三番目のテーマ“Efficiency for Service”を推されるだろうとの考えが浮かびました。学長の正確なお考えがどうあるかと、最終的には。卿とロバートソン学長が全ての中から最後のテーマ「Mastery for Service」を選ばれたことは明らかなのですが、最終的な話し合いに関しては何も伺っておりません。

私は、サンタンで二年間説教しました。フレッド・C・エルフォード (Fred C. Elford) 教授を毎週末のみならず、夏季に数週間ゲストとしてお迎えしたことは大きな喜びでした。同教授は、ロバートソン博士が私に説教の解説を求めた理由を立証できる立場に今もおられると思います。それから二四年後の一九三二年まで、私がカレッジを訪問することはありませんでした。私のかつてのテーマが、カレッジの講堂入り口近くのステンドグラスに刻

まれているのを目にした時、この言葉は永遠のものになったのだと実感し、深い感動を覚えました。私は計画のほんの一端を担ったに過ぎません。ウィリアム・マクドナルド卿が寛大なお心により成長させてくださったことを感謝いたします。以上が私の話です。  
ご成功をお祈り申し上げます。

当書簡で言及されている内容は、当時カレッジと関係があり、現在オタワにいるF・C・エルフォードによって確認されました。

書簡に登場する、講堂入口近くのステンドグラスに刻まれた“Mastery for Service”は確認することができなかった。図書館の方にお尋ねすると、取り外して倉庫に仕舞われていると聞いたことがあるとのことだった。実は、当初マクドナルド・カレッジとして使われていた校舎は売却され、現在セジャップの(37)ジョン・アボット・カレッジが使用している



レアード館入口の“Mastery for Service”  
(反射するため建物内から撮影)



ジョン・アボット・カレッジ  
(旧マクドナルド・カレッジ)

のである。その代わりと言っているのかどうか、レアド館 (Laird Hall) 入口のガラスに大きくエンブレムが刻まれていた。

関西学院高等学部創設は一九二二年四月であった。初代高等学部長に就任したベーツが高等学部のモットーとして "Mastery for Service" を提唱したのは、開設と同時にではなく、その年度中（一九一三年三月）のことであったと考えられる。<sup>(38)</sup> 百年前の原田の森に思いを馳せながら、同じモットーを持つマクドナルド・カレッジを後にした。

#### 4 アルマンさんとチャールズさん

モントリオールではチャールズさんに四泊、アルマンさん宅に三泊させていただいた。

一九九九年秋にアルマンさんのお宅を訪ねた時、ベーツが残した写真アルバム（段ボール二箱分）を拝見した。<sup>(39)</sup> このアルバムは、最終的に



白薩摩の急須と湯飲み（ベーツ遺品）



紅茶をいただいたカップ  
（ベーツ遺品）

はカナダ合同教会アーカイブズに寄贈するとお聞きしていた。しかし、その大半は日本で撮影されたものだ。関西学院にとって貴重な写真が数多くある。ベーツの生涯を知る上でも欠かせない資料である。今回、アルバムへの強い関心を改めて説明し、関西学院の創立一二五周年が近いこと、その記念事業の一つとして大

学博物館の設置が計画されていることをアルマンさんと奥様のロザリン (Rosalind Peppal) さんにお話しした。その結果、アルバムをそっくり三年間関西学院にお貸しいただけることになった。こちらで複製を作るお許しを得ることができたのだ (アルバムの入ったダンボール二箱は、二月二十八日に無事関西学院に到着した)。

チャールズさんのお宅では、ベーツが日本から持ち帰った陶磁器、漆器、小家具等を拝見した。美しい九谷焼や白薩摩を一つ一つ手にとって眺める内に、ベーツの好みが何となくわかってきた。滞在中の朝食は、チャールズさんが用意してくださった (アルマンさんのお宅でも、朝食はアルマンさんの担当だった)。ベーツの遺品のティーカップで飲む紅茶は一層美味しく感じられた。チャールズさんの奥様マリジョゼ (Marie-Josée) さんは典型的ケベコワズ (ケベック人女性) で、フランス語しか話されなかった。チャールズさんがおられない時は、フランス語の単語を並べて意思疎通を図るしかない。ケベコワ (ケベック人) はどこかにカナダ先住民の血が入っているのが特徴だそう。だから、ケベコワの子どもは成長の過程で先祖がえりした顔つきになる時期があるらしい。それは親にとって特別愛おしく思える時だとおっしゃった。また、茹でとうもろこしを食べる時、フランス人はナイフとフォークを使うが、ケベコワは両手で持つてかぶりつくそうである。ちょうどとうもろこしのシーズンだったので、何度か口にする機会があった。私があり幸せそうにかぶりつくので、「そんなに好きなのか」とアルマンさんは笑っておられた。

滞在中、チャールズさんの一人娘エリア (Helia) さん、アルマンさんのご長男フィリップ (Philippe) さん<sup>(40)</sup> にもお目にかかった。フィリップさんは全員を自宅に招待し、手料理でもてなしてくださった (もちろん、茹でとうもろこしも用意されていた)。そんな時、会話は自然にフ

ランス語になる。エリアさんは、フランス語で話されている内容を私のために時折英語で説明してくださった。思えば、エリアさんと初めて会ったのは前回の訪問時だった。恥ずかしがり屋の小さな女の子で、カタコトのフランス語で言葉を交わすのが精一杯だった。一七歳の時、NHKの番組出演のため同じ高校の仲間と来日された。<sup>(4)</sup>関西学院訪問の希望をお聞きしていたので、京都のホテルまで迎えに行き、引率の先生に別行動をお許しいただいた。その時「日本ではフランス語が通じないから、毎日英語を使っているの。こんなに英語を話すのは初めてだからドキドキなの」と言っておられた。今や立派なバイリンガルである。

アルマンさんは、「*マistry for Service*」を選んだのか、私が祖父にちゃんと聞いておけば良かったのに、申し訳ない」とおっしゃった。チャールズさんは、トロント大学の学生時代、哲学を専攻されていたこともあって、ベーツの家を訪ねたり、本をもらったり、教会と一緒に行く機会が何度もあったそうである。しかし、モントリオール時代のことにはベーツに尋ねたことがなかったと言われた。アルマンさんによれば、ドーチェスター通り教会は既がないそうである。

モントリオールでお会いしたご子孫の中で、私がベーツの面影を一番強く感じたのはエリアさんである。若い女性に対して失礼だが、凝視したくなるほど似ている。フィリップさんには青年期のベーツの面影が感じられた。それは、フィリップさんが趣味で絵を描かれることから受ける印象のせいかもしれない。しかし、フィリップさんがベーツに似ていることに關しては、一族の賛同は全く得られなかった。

モントリオール滞在中、送迎から食事の世話に至るまで、アルマンさん、チャールズさんご兄弟とそれぞれのご家族には大変お世話になった。感謝してもしきれない。“Be Kind”ベーツは、



新しく赴任する宣教師にくれぐれもそうあるようにと念を押していた<sup>(42)</sup>。また、自分の子どもたちにもそう求めていた<sup>(43)</sup>。この言葉は、家訓として今もモントリオールに生きている。

## 5 彫刻家齋藤智さん

二〇一〇年秋、齋藤智さんというケベック州在住の彫刻家<sup>(44)</sup>がベーツに関する資料を求めて学院史編纂室に來られた。あいにく、私は休みを取っていたためお目にかかることができなかったが、『関西学院のエスプリ』、『関西学院史紀要』等をお持ち帰りになったそうである。後日、私が書いた文章を読んで感動したとお電話を頂戴した。齋藤さんご自身は慶應義塾大学のご出身だが、アルマンさんの奥様ロザリンさん（モントリオール美術館学芸員）からベーツの名をお聞きになり、年に一度の帰国中、貴重な時間を割いて、関西学院にお立ち寄りくださったのだ<sup>(45)</sup>。

齋藤さんは、実際にキャンパスを歩かれ、また、私の書いた文章をお読みになって、関西学院におけるベーツの働きの大きさを知り、感銘を受けたとおっしゃった。そして、ベーツを理解するにはカナダのフランス語圏の田舎に来て、身体で感じるが必要と力説され、カナダに調査に来る時はぜひとも連絡して欲しいと言われた。カナダ在住四〇年を超える方の言葉には説得力があり、私はこの機会に齋藤さんをお訪ねしようと思った。

齋藤さんは、モントリオールからバスで二時間ほどの所に、フランス系カナダ人の奥様ルイズ（Louise Doucet）さんと暮らしておられる。住所を Ways Mills と書いておられたが、正確には Municipalite de Barnston Ouest<sup>①</sup>、その中にある昔の村の名前が Ways Mills だそうだ。英語で Eastern Townships、フランス語で Estrie と呼ばれる地域で、アメリカ国境まで二〇分と

のことだった。カナダへの出発が近づくと、この他にも細々としたアドバイスを送られてきた。モントリオールのバスターミナルには二〇〇三〇分前に着くこと、そこで Magog までの往復切符を買うこと、「メイゴグ」は英語式発音で、フランス語では「マゴグ」となること、往復は「アレ・ルトゥール」と言うこと等々。齋藤さんは、マゴグのバス停まで車で迎えに来てくださった。そこからご自宅まで二五分で到着した。

「湖、放牧地、森、川、穏やかな丘陵が広がるモントリオール東方一六〇kmにある小さな村ウエイズミルズを見下ろす農場（一三五エーカー、約一六万五千坪）が我が家です。ここでケベック生まれの家内と一緒に、初めの頃は焼き物を、その後は彫刻の制作をして、作品を売るだけで暮らしてきました。畑で野菜も作っていますし、鶏も飼っています。豚を飼ったこともあります。ウエイズミルズの美しい空間に居構えることが出来たことは、制作にとって、とりわけ重要なことでした」<sup>(46)</sup>。私が訪ねた場所について、齋藤さんご自身のこの言葉以上に相応しい説明は思いつかない。実に伸びやかで、心地よい世界だった。大自然の中、石の彫刻があるべき



齋藤さんのお宅の庭からの眺望



齋藤さんのお宅の庭



ビービの丁場

場所に置かれていることで、目の前の豊かな自然が悠久の自然となって心に沁み入る。美味しい水と畑で採れた新鮮な野菜や果物がお手製の陶器に盛り付けられ、食卓に並んだ。

「ロザリンとあなたのおかげでドクター・ベーツという優れた教育者、優れたカナダ人の存在を知ることができたのは幸運でした。こうした方の日本の文化や歴史への貢献をもっと多くの日本人、カナダ人に知って欲しいと思います。池田さんがきつと素晴らしい書き物にしてください」と確信しています。僕の知る素晴らしいカナダ人の存在から、彼の人柄を自分なりに想像するのも楽しいことです」。齋藤さんは、車で周囲の街を案内しながら、またご自分の敷地内を散策しながら、私にこのような話をされた。そうした中で最も印象的だったのはビービである。ベーツの父親がロリニャルで石を扱う商売をしていたことを知った齋藤さんは、ご自分との共通点に

驚かれた。「それなら、御影石はビービから運んでいたに違いない」。そう言って、原石採石場に連れて入ってくださいだったのだ。日本語で「丁場」と言うそうだ。そこは地球という星の生命を感じさせる場所だった。地球の命を目の当たりにする生活は、時の流れをどう映し出すのだろう。「あの辺りからは柔らかないい石が採れますよ」（何億年もの間眠っていた石が肌を現した時、その「柔らかさ」に心打たれることがあるそうだ）。はるか彼方を指し示される齋藤さんを見つめながら、こうしてベーツも父親に連れられ丁場に來たことがあったに違いないと思った。地元の良い墓地をご案内くださった時は、これは〇〇

で採れた石、この御影石とあの御影石は、一見同じに見えるかもしれないが値段は全然違う、と墓石の説明をされた。恐らく、ベーツの父親もそうであつたろう。石を身近に感じる環境が育んだベーツの感性というものを深く考えさせられた。「一五〇年近く昔のカナダで、石工がどのような暮らしをしていたか、社会的にどういう位置にいたのか、ベーツ理解を深めるため、そういうことも考えてみてください」。齋藤さんは私におっしゃった。

齋藤さんのお宅を訪問し泊めていただいたのは、モントリオール到着の翌々日で、ロリニャルやヴァンクリーク・ヒルでベーツの父親の仕事について詳しく知る前のことであつた。大自然の中で、齋藤さんとルイーズさんの温かいもてなしに包まれ、時差ボケはどこかに吹き飛んでしまった。お二人のご親切に心から感謝したい。

## V トロントにて

モントリオールからトロントへは列車で移動した。「祖父は船でモントリオールに来たことがあつた。一九四八―九年頃だつたと思う。船着場まで迎えに行つたのを覚えている」。そうアルマンさんからお聞きしたが、今はそのような便はないそうだ。列車がケベック州からオンタリオ州に入ると、車内放送の順番が「フランス語・英語」から「英語・フランス語」になった。それだけで気持ち軽くなるのだから不思議である。

トロントでは、友人のカミラ・ブレイクリー (Camilla Blakeley)<sup>(47)</sup> の家に泊めてもらった。カナダ合同教会アーカイブズがオープンしているのは月曜から木曜で、私のトロント滞在予定は金



ロイヤル・ヨーク・ロード教会

曜から月曜（祝日）だったため、アーカイブズでの資料調査は諦めていた。代わりに、ベーツ関係地巡りに集中した。幸い、ベーツが住んでいたのは、友人宅から徒歩圏内だった。

まず、ロイヤル・ヨーク・ロード合同教会に向かった。ここは晩年のベーツが通っていた教会である。最晩年、入退院を繰り返していたベーツは、死の二週間前、卒業生の則末牧男（旧中昭12・予科昭14・旧神昭17）牧師にこう言った。「則末さん、今度は私はもうこの家に帰ってこれないと思う。お葬式の時、ヨハネ伝一七章を読んでください」。<sup>(48)</sup>一九六三年二月二三日、ベーツは天に召された。「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました」。それは何よりもベーツに相応しい言葉であったように思う。司式はバーナード・エナルズ（Bernard Ennals）牧師が担当した。同牧師のご子息ピーターさんがトロント大学在学中チャールズさんと知り合われたこと、マウント・アリソン大学教授となつて

から、文学部客員教授（一九九一）として関西学院大学で教えられたこと等、不思議な縁を感じさせる出来事を思い出しつつ、私は教会を訪ねた。

この教会には、一九四一年の帰国時にH・W・アウターブリッジによって伝道局に運ばれたベーツの胸像が一九八七年まで置かれていた。<sup>(49)</sup>また、ベーツの肖像画も飾られていた。<sup>(50)</sup>それは、どんな肖像画だろう。まだ、

あるのだろうか。会堂には鍵がかかっていたが、車が停まっていたので、無人ではないと思われた。呼び鈴を押すと、たまたま用があつて中におられた教会員が招き入れ、中を案内してくださった。ロス (Ross W. Murray) さんとおっしゃる男性で、ベーツのことを覚えていたと言われた。肖像画が見当たらなかったのでお尋ねすると、「昔は飾られていたように思うが、今は倉庫に入れているのではないだろうか」とのことだった。壁には「名誉牧師」としてベーツの写真が飾られていた。

教会を出て、ベーツが住んでいた家に向かった。「42 Royal York Road」。何度もベーツ書簡で目にした住所である。それは、オンタリオ湖に程近い所で、広く静かな通りに面していた。家の呼び鈴を押したが反応はなかった。住人が退去した直後のように思われた。人の気配があまり感じられず、荷物を片付けている途中のように見えたからである。

『母校通信』には、ここを訪ねた卒業生の記事が掲載されている。その内のいくつかを紹介しよう。「……トロントの先生の住居はタクシーで三十分もかかる辺鄙な所で而も運転手が探すのに随分骨を折ってくれたが先生の顔を見た瞬間私は兎に角来てよかったとしみじみ思ったものだ。……家に足を踏み入れると懸字も額の絵もペナントも花瓶も置物もすべて日本製で無いものはなく、重い卒業記念のアルバムを沢山抱えて来て一枚一枚ページを繰り乍ら当時を思い起こされる先生のいきいきしたまなざし。先生の思い出のすべては日本の事だったのだろう。私が戦後の日本のことを話すと『ウエル、ウエル、ウエル』とつぶやきつつ自分の頭に浮ぶ昔の日本とピントを合せられるのだろう。静かに日本のことを思うとなつかしく、何とかしてもう一度日本に引き度い。事実この人〔妻〕の病気が無かつたら再度行けただろう。としみじみ云われた時には思



マッセイ・ホール

いなしか先生の目頭にはあつい涙が浮んでいた様に思えた。…先生にバスの停留所迄送つて頂き心を残しつつ去つたのは四月七日の午後四時頃のことです。<sup>(31)</sup>

「…私が車から降りると同時に、ベーツ先生は待ちかまえて居られたと見えて、飛んで出て来られ、非常に喜んで下さいました。…先生は日本を愛し、日本趣味であられる事をよく承知致して居りましたので、香、竹細工、人形、俳句、箸、筆、等のお土産を持参致しましたが、殊に、昨年八月関西学院創立七〇周年を記念して、関西学院グリークラブ六〇周年記念音楽会を神戸国際会館、大阪フェスティバルホールで開催し、その際、我々が吹き

込んだレコードを持参致しました処、非常に喜ばれ、早速古びたレコードと共に『空の翼』や『オールド関西<sup>マ</sup>』を歌われ、こんなうれし事はないと病気のミセス・ベーツと共に泣かれました。…丁度私がベーツ先生とお話しておりました処へ、小宮院長よりミセス・ベーツの誕生日の祝電が配達されました。翌十六日がミセス・ベーツの八十四回目の誕生日だったのです。…帰りがけに、ベーツ先生の庭に植えてある桜の木を見て、『これは日本政府よりカナダ政府に贈られた桜の内、トロントの日本領事館が特に一本私の庭に植えて下さったものです。貴方がトロントに来られた機会に領事館に行つてよろしくお礼をいっておいて欲しい』と申されました。…翌十六日、早速トロントの日本領事館に井上領事を訪れ、ベーツ先生の事を呉々もよろしくお願いし…。更に後日、オタワの大使館に萩原大使を訪れ、ベーツ先生の事を呉々もよろしくお願い致しました<sup>(32)</sup>。

この桜の木がどこにあるのか、私には見つけることができなかった。しかし、最晩年のペーヅを日本の桜が見守っていたというのは嬉しいことである。

午後からチャイナタウンに出て、マッセイ・ホールまで歩いた。一九〇二年二月、ここで行われた学生ボランティア大会に参加したことが献身のきっかけとなったのである。ペーヅの働きの大きさを考えると、関西学院の発展はここから始まったと言えるかもしれない。オーブンは一八九四年と銘板にあった。時代を感じさせる趣のある建物だが、当時は最新の大きなホールだったことだろう。今もジャズコンサート等が行われる現役のホールである。近代的なビルが周囲に建ったため、全容を写真におさめるのは容易ではない。

今回、トロントでの写真撮影に素晴らしい協力者が現れた。私が持参した古いデジタルカメラを見たカミラの夫ガーリー（Gary）が撮影を申し出てくれたのである。プロの写真家であるガーリーは、地図で対象物の場所を調べると、日の当たる時間を予測し、光の加減が最も良いと思われる時間帯に撮影に行ってくださった。感謝の言葉もない。

トロントからは、二五〇キロ離れたマスコカ（Muskoka）地方まで足を延した。晩年のペーヅが息子の家族と何度か夏を過ごした場所である。その日、カミラは一人で往復五百キロの道のりを運転してくれた。結局、トロントで私が訪ねたいと前もって伝えていた全ての場所にカミラは同行してくれたことになる。まさに、持つべきものは友である。

トロントの街はそこかしこで工事が行われていた。モントリオールでも目に付いたが、トロントの工事の多さはその比ではなかった。長い冬が来る前に終らせる必要があるのだろう。また、モントリオールでは見かけることの少なかったアジア人がトロントには大勢いた。カミラは私に



こう説明した。「ケベック州はフランス語政策をとっているので、中国系企業は撤退してトロントに移ったのよ。英語に加えフランス語までというのは、中国人にとって負担が重過ぎるでしょう。Estonsとこうデパート名についても、『...s』という表現は英語的という理由で、ケベック州では認められないの。まず『s』を取って『イートン』、それでもまだ不十分で、フランス語風に『イトン』と発音しなければならないのよ」。

## VI おわりに

カナダ東部訪問中、私はベーツの存在をいつも身近に感じていた。どこにいても、ベーツの温もりに包まれているようだった。その思いは、孫のチャールズさんも同じだったらしい。「祖父は今ここにいる」。私と行動を共にされていた時、チャールズさんは何度もそう呟かれた。今回の訪問で得た最大の収穫は、その不思議な感覚だったように思う。この感覚は、ベーツ研究を進める上で大きな推進力になるものである。こうした情緒的表現に眉をひそめる人には、今回カナダで経験した数々の出会い（人物・資料）から、今後役立つと思われる多くの示唆を得たと言えれば良いだろうか。新たに得た示唆をさらなる資料収集や既存資料の見直しに生かし、時間をかけまとめることが私に課せられた次の仕事である。そのさわりは前項までに記した。既に頭の中で形になりつつあるものもある。

今回、計画段階で候補に挙げながら日程の関係で省いた訪問先は次の通りである。中でも、キングストンとオタワはぜひ訪ねたい。

ブラインド・リヴァー (Blind River) … 牧師補として最初の任地。

ポーツマス (Portsmouth) … 牧師補として二番目の任地。

キングストン (Kingston) … クイーンズ大学で M. A. を取得。

モリスバーグ (Morrisburg) … このメソヂスト教会で挙式。

オタワ (Ottawa) … ドミニオン・メソヂスト教会で牧師としての按手を受けた。関西学院から院長選出の電報を受けた地でもある。両親が隠退後暮らしていた。

カナダ東部以外にもベーツに関係する場所がある。<sup>(53)</sup> それらを訪ねること、また今回できなかったカナダ合同教会アーカイブズでの資料調査に時間を割くことも、今後に残された大きな課題である。

二〇一三年一月、ロイヤル・ヨーク・ロード合同教会のサンドラ・コネリー (Sandra Conery) さんから嬉しいお便りを頂戴した。<sup>(54)</sup> ベーツ本人をご存知のサンドラさんは、学院史編集室が関西学院のウェブサイトに英語で公開している様々な情報に目を通し、感銘を受けたそうだ。「ベーツ博士や関西学院の創立に関った人々は、自分たちが創り上げたものを誇らしく思うことでしょう」と書かれ、次のように結ばれていた。

「私たちの教会はニュースレターを発行しています。私はベーツ博士に関する記事を書くつもりです。あなたから得た情報と自分自身のベーツ博士との関係に基づいて。さらに、関西学院大学の創立やスクール・モットー “Mastery for Service” のミステリーに関ったその他のカナダ人にも大いに関心を抱いています。 “Mastery for Service” の話には特に興味をそそられました。誰

が誰から何を借りたのでしょうか。誰がこのモットーを考案したのか、確かなことは決してわからないのかもしれない。でも、事情がどうであれ、それは素晴らしい言葉です」。

カナダでの調査は、一九九九年秋以来、一三年ぶりであった。その間に、ぜひお会いしたいと思っていた関係者が故人となってしまった。どうしてもつと早くに再訪しなかったのかと悔やまれる。こうした調査はタイミングを逸してはならないのだ。そのことを肝に命じ、八三年前にベーツが商科の学生に贈った言葉を今一度噛み締めたい。「世界は君に問うだろう。『君はどう思うか？』ではなく『君に何ができるか？』と」。<sup>(35)</sup>

【注】

- (1) カナダの地図は、池田裕子「ベーツ街道をゆく！」(『学院史編纂室便り』第三六号、二〇一二年一月一日、七～八頁)より転載。同誌でもごく簡単にカナダ東部での調査の概要を報告している。
- (2) 池田裕子「ベーツ先生の原点」[K. G. TODAY] Vol. 252、二〇〇九年六月、裏表紙。
- (3) ベーツの日本語履歴書は、ベーツが書いた英文履歴書を日本人教職員が訳したものと思われる。作成日付はないが、「職業」欄は「大正九年十月八日 兵庫懸知事ヨリ認可ヲ受ケ同學院長ニ就任ス爾來兼テ倫理學ヲ教授ス」で終わっている。その他にも「リオリナ村」「リオーリナ村」「リオグナル村」等、様々な表記の日本語履歴書が存在する。「レ・オリジナル」と書いた教え子もいた。『ウィキペディア』には『ロリジネ』と表記されている」と辻学教授(広島大学大学院)から情報をお寄せいただいたこともある。
- (4) 駐日カナダ大使館広報部から池田裕子宛メール、二〇〇九年四月一四日。
- (5) アルマン・デメストラルさんは、何度も関西学院を訪問されている(表敬訪問、法学部客員教授等)。二〇一三年四月には、再び客員教授として法学部にお迎えする予定である。二〇〇一年一二月、

関西学院大学から名誉博士学位が授与された（池田裕子「父と娘」『K. G. TODAY』No. 264, 二〇一一年六月、裏表紙）。お祖父様とお母様から関西学院のことを何度も聞かされて育ったアルマンさんは「初訪問は一九七九年だったと思うが、夢の世界に足を踏み入れたようだった」と、その時の印象をインタビュー動画「KG Word Citizens」の中で語っておられる。

- (6) 私が初めて「Original」を「ロリニヤル」と表記したのは、『学院史編纂室便り』第一二号（二〇〇〇年二月一日）であるが、その時はこうした確認を経てのことではなかった。

- (7) ベーツの日記を初めて見たのは、一九九九年にトロントのスコット・ベーツ（Scott Bates）さん（ベーツの三男ロバートの孫）のご自宅を訪問した時だった。その後、長期にわたりお借りしていたが、二〇〇九年六月にスコットさんご自身が関西学院を訪問された時、「このままお使いください」と言ってご寄贈くださった。その時、ベーツの描いた絵やスケッチブックも併せてご寄贈いただいた。

- (8) 一九九九年にアルマンさんのご自宅を訪問した折りに拝見した書簡の中から見つけたものである。この手紙が書かれた当時、アルマンさんのご家族は牧師をしていた父親の仕事の関係で、英国（ロンドン郊外）で暮らしていた。

- (9) C. J. L. Bates, "The Sixty Years in the Ministry," 『関西学院七十年史』五六五～五七一頁。

- (10) 四〇七番、日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』三九三版、一九六八年。

- (11) 三七六番、同右。

- (12) Robert Bates, *Newcomers in a Newland*, private edition, 1988, p. 29.

- (13) 『日本メソヂスト教会第十四年会記録』によると、一九〇二年五月一日から東京麻布教会で第一四年会が開催され、その年の総会出席予定者の一人に平岩の名が挙げられている（一七頁）。さらに、翌年の『日本メソヂスト教会第十五年会記録』には、「総会代議士報告」として、一九〇二年九月四日から一九日までウイニペグで開催された総会に二八九名が出席したこと等、

詳しく伝えられている(三四～三五頁)。

- (14) チャールズ・デメストラルさんは、二〇〇九年にネパール旅行に向かわれる途中共日され、一月六日から一日までベーツ館に滞在された。滞在中、関西学院会館ベーツチャペルの日曜礼拝の他、教育学部、中学部、初等部のチャペルでお祖父様の想い出をお話くださった(『学院史編纂室便り』第三〇号、二〇〇九年一月二十五日、一頁)。
- (15) Robert Bates, *op. cit.*, p.17.
- (16) PLH (Patrimoine L'Original-Longueuil Heritage), *L'Original-Longueuil*, 2011, p. 35 & pp. 38-39.
- (17) C. Thomas, *History of the Counties of Argenteuil, Quebec and Prescott, Ontario from the Earliest Settlement to the Present* (1896), reprint ed., p. 526.
- (18) PLH, *op. cit.*, p. 39.
- (19) ベーツ自身がそうしていたように、ここでは「ヴァンクリーク・ヒル」のことを「ビル」と呼ぶ。
- (20) ヴァンクリーク・ヒル博物館で拝見した一九〇〇年の地図には「人口二〇〇〇」とあった。ロリニャルの倍である。
- (21) Email of July 22, 2012, from Angie Renwick, Summer Student, Vankleek Hill Museum, to Armand de Mestral.
- (22) Email of August 7, 2012, from Michelle Landriault, Museum Studies Registrar, Vankleek Hill Museum, to Armand de Mestral.
- (23) マーテル社が二〇〇三年に撮影したスタッフの集合写真には二五名の姿が写っている (*Marcel & Sons Inc. Souvenir Book*, 2003, p.36)。
- (24) C. Thomas, *op. cit.*, p. 526.
- (25) ベーツの描いたコテージの絵は、二〇〇九年に曾孫のスコット・ベーツさんから寄贈いただいたスケッチブックの中の一枚である(注7参照)。Thus Spoke Bates II, May 2012の表紙にも使わ

せていただいた。ベーツの故郷訪問は、ベーツの絵心が育まれた背景を探る旅でもあった。

- (26) ヴァンクリーク・ヒルの旧メソヂスト教会の前で、アルマンさんはブランチ・メモリアル・チャペルに似ていると指摘された。確かに、メソヂストの教会には共通の雰囲気があるように思われた。ブランチ・メモリアル・チャペルはS・H・ウエンライトが靈感に打たれたアメリカ合衆国ミズーリ州シェルビーヴィル (Shelbyville) の教会を模したと言われている (村上謙介『ウエンライト博士伝』教文館、一九四〇年、八頁、一〇九頁)。

- (27) Robert Bates, *op. cit.*, p. 4 & p.16.

- (28) イーストン・コーナーは、カナダの首都オタワの六〇キロ南に位置する。

- (29) ベーツの従姉妹 (父の弟 Philander Bates の娘) Eugenie [Jean] Lillian Bates も宣教師となつて来日した。東洋英和女学院史料室酒井ふみよさんによると、ジーンの前戦前の働きは、一九二一～二二年、東京 (東洋英和)、一九二三～三四年、金沢 (川上幼稚園第八代園長)、一九三四～四〇年、東京 (カナダ合同教会伝道部少女部での伝道) だそう。ご教示くださった酒井さんにお礼を申し上げます。

- (30) 周囲をセメントで固めた墓石の写真を後述の彫刻家齋藤智さんにご覧いただいたところ、このやり方ではいずれまた沈むと言われた。「別のやり方でなくて残念」というのが、石の専門家の第一印象だそう。

- (31) 『TSUBASA : 関西学院大学応援団総部吹奏楽部創部五〇周年記念誌』、二〇〇四年、二五～二六頁。

- (32) *The Recorder and Times*, October 7, 1964, etc.

- (33) *McGill University Scrapbooks* には日付順に様々な切抜きが集められているため、資料の少ない時代のことを調べるのに重宝する。ベーツ在学中の大学の出来事を知りたければ、該当年を順番に見ていけば良いのである。ベーツ在学中に大学で火事があり、授業が中断したことや、学部長による学生在籍数 (男女別) の報告も掲載されていた。

- (34) 池田裕子「カナダ訪問記―C・J・L・ベーツ第四代院長関係資料調査の旅―」『関西学院史紀要』第六号、二〇〇〇年、一六七―一七二頁。
- (35) 『K. G. TODAY』No. 269、二〇一二年四月、裏表紙。
- (36) *Macdonald College Annual*に掲載された書簡部分のコピーは、マギル大学アーカイブズのゴードン (Gordon Burr) さんに送っていた。入手に当たっては、アルマンさんのご協力を得た。
- (37) セジャップ (CEGEP: Collège d'enseignement général et professionnel) は、ケベック州特有の学制に基づく大学基礎教養機関。州内の大学に進む場合、日本の高校三年から大学一年に相当する二年間、CEGEPで基礎教養を学ぶ必要がある。
- (38) 辻学「校訓 Mastery for Service と『ベーツ文書』」『関西学院史紀要』第二二号、二〇〇六年、一〇―一二頁。
- (39) 池田裕子、前掲文「カナダ訪問記」、一五八―一六〇頁。
- (40) フィリップさんは、父親のアルマンさんが神戸大学大学院で客員教授をされていた二〇〇九年秋に来日された。その時、ルース・M・グルーベル院長、杉原左右一学長、田淵結宗教総主事とお会いになっている。
- (41) 二〇〇五年八月、NHK広島放送局制作の被爆六〇周年記念番組「ヒロシマの伝言―『はだしのゲン』から世界の若者へ』の招待により、エリアさんは高校の仲間と共に来日された。八月一日、関西学院を訪問し、山内一郎理事長、畑道也院長、田淵結宗教総主事等と歓談された。エリアさんが出演された番組は八月二八日、NHK総合テレビで全国放映された『学院史編纂室便り』第二二号、二〇〇五年十二月一日、一頁。
- (42) L. S. Albright, "The Rev. C. J. L. Bates, M. A., D. D., LL. D." December 27, 1963 (UCC Archives).  
ロイヤル・ヨーク・ロード合同教会で行われたベーツの葬儀での弔辞と思われる。
- (43) 「ベーツ先生の追悼会での則末牧男先生の説教」(UCC Archives)、詳細不明。

(44) 王室カナダ芸術院会員である齋藤智さんの彫刻は日本国内でも見ることができる。私は出発前に大阪本町のNMプラザ御堂筋前に建つ「風姿 (ALLURE)」を拝見した。石なのに柔らかさを感じた。東京では、日本橋三井タワーに「はる (HARU)」がある。長野オリンピック記念モニュメント「明時 (あかとき、ALBA)」も齋藤さんの作品である。

(45) 関西学院には、慶應義塾大学日吉寮の後輩に当たる黒田豊夫さん (神戸市在住) が同行された。私のカナダ訪問が近づく、黒田さんは何度か学院史編纂室に足を運ばれ、齋藤さんのことを色々教えてくださった。慶應OBのネットワークの強さ、寮生活で培われた深い友情に感銘を受けた。黒田さんに改めて御礼を申し上げます。

(46) 齋藤智「日吉寄宿舎を出て四八年―カナダでアーティストに転じた男の軌跡」『寮和会会報』第三〇号、二〇〇八年九月一五日、一頁。この中で齋藤さんは在寮生とOBに次のように語っておられる。「存在しなかったものを創りだそう、創造的であれ、国際的であれ、リーダーであれ等々、スローガンをつ(く)り、それを口にするだけなら誰にでも出来ることです。…自分の目で見自分の頭で考える、その時の知的流行、ファッションに流されずに、大きく考える、自分の生き方を自分で決める、自分にしか出来ない物と事を創りだす。そして、出来れば、美しいものを心に留めて見る目を身に付ける。好奇心、夢、パッションをいつまでも持っていたい、この意味もよく考えたいと思います」(一一頁)。

(47) カミラは、一九九一年から翌年にかけて文学部客員教授を務めたロナルド・ジェンキンズ (Ronald Jenkins) 夫人として来日した。以来、カナダと日本に離れても親しくおつきあいを続けている。プロの編集者でもあるカミラは、いつも私が書いた拙い英文をチェックし、適切なアドバイスを与える。この場を借りて、変わらぬ友情に心から感謝したい。

(48) 前掲文「ベーツ先生の追悼会での則末牧男先生の説教」。則末は、トロントの日系人教会の牧師を務めていた。ベーツの葬儀で則末によりヨハネ伝一七章が朗読され、第四節が強調されたこと



- が記録に残っている (*Montreal-Ottawa Conference Minutes*, 1964, p.17 (UCC Archives))。
- (49) 木村禎橋「関西学院高等学部創設時代」『関西学院六十年史』一九四九年、二四四頁。一九九九年のカナダでの調査は、この胸像に関する疑問が発端であった。現在、胸像はスコット・ベーツさんが所有されている。詳細は、池田裕子、前掲文「カナダ訪問記」、一五四～一五八頁、一七二～一七六頁。
  - (50) Bernard Ennals, "The Contribution of Dr. C. J. L. Bates to Royal York Road United church, Toronto, March 27, 1987 (UCC Archives) .
  - (51) 滝公平「ドクターベーツを訪ねる記」『母校通信』一五号、一九五五年一〇月、八頁。
  - (52) 木下百太郎「ベーツ先生会见記」『母校通信』二五号、一九六一年五月、二六頁。
  - (53) ベーツはサスカチュワン州リジャйна (Regina) のノックス・メトロポリタン合同教会 (Knox-Metropolitan United Church) で牧師をしていた時期もある。
  - (54) Letter of January 8, 2013, from Sandra Connery, Chair of the Royal York Road Church Council, to Yuko Ikeda.
  - (55) 『関西学院高等商業学部卒業アルバム』一九三〇年。